

飛騨編集行

山本夏彦

ダイヤモンド社

山本夏彦

編集兼発行人

ダイヤモンド社

主な著訳書

「日常茶飯事」(工作社)

「年を経た鰥の話」(絶版)

「変痴気論」(毎日新聞社)

「毒言毒語」(実業之日本社)

編集兼発行人

昭和51年3月11日 初版発行

著 者 山 本 夏 彦

© 1976 Natsuhiko Yamamoto

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集電話 東京(504) 6403
販売電話 東京(504) 6517
振替口座 東京 25976

編集担当/花田茂明

落丁・乱丁本はお取替えいたします

加藤文明社印刷・誠光社製本

1010-612000-4405

はしがき

「小説新潮」の「社会望遠鏡」という欄に、しばらくコラムを書いたことがある。ながく河盛好藏氏が担当していた欄だから、この話があったとき、喜んで引き受けた。今回のこの本はそのなかから選んだものに、「室内」に書いたものを加えたものである。

立読みは本屋はいやがるが、著者は必ずしもいやがらない。たとえば、このなかの「オイコラ考」「私の十八番づくし」の如きは僅々八ページを超えない。ご用とお急ぎのないかたは、お手間はとらせないから立読みしていただきたい。読者と著者の仲は不思議な縁で結ばれている。その一編を見れば、縁の有無は明らかになるだろう。

著者のためには買わずとも読め、書肆（しよし）のためには読まずとも買えと、むかし斎藤緑雨は言ったが、このことは今も昔も変わらないように思われる。

昭和五十一年春

著者

目次

はしがき

編集兼発行人

編集兼発行人

3

毎号及び時々寄贈

10

解題

18

背骨まがり

26

人生は短く本は多い

35

袖の下

チップ出す人

45

赤線復活

52

目 次

鉛筆の削り方	135
君には忠	142
人みな飾って言う	
人みな飾って言う	151
電話の片っぱ	157
オイコラ考	163
コラムの言葉	170
男の血の道	178
輪転機と言論の間	186

編集兼発行人

編集兼発行人

編集兼発行人楓井金之助という名を、少年のころ、私は新聞の奥付おくづけでおぼえた。楓井はむずかしい字で、カエデキと読むと、そのとき私は知った。

奥付を見ると、けし粒大の字でこの名が出ていた。それを見るときもなく見て、毎日のことだからおぼえたのである。以来四十余年たったから楓井氏はもう故人だろう。縁もゆかりもないこの人を、死ぬまで忘れないとは思議しぎといえは不思議である。

私は奥付の読者である。奥付は文字ではあっても、文章ではないから、読者と称してはおかしいが、やはり読者である。新聞や雑誌の奥付は、スペースは小さく見るに値いしないが、それでも私は見た。書籍の奥付のほうは、巻末の一ページを占めて、定価もここに出ているから、必ず見た。

奥付は戦後はなくていいものになったが、戦前はなくてはならないものだった。発行年月日、編著者氏名、印刷人氏名、発行人住所氏名を明記することが、法によってきめられ

ていた。法というのは新聞紙法のこと、これは明治初年の讒謗律にさかのぼる。さんぼう律とは政府を罵詈さんぼうしたら取締るぞという法で、いかにも悪法らしい感じが出ていていい名である。著者と発行者の氏名を並記させるのは、その必要が生じたとき、訴えたりつかまえたりするためである。

私は本の奥付を愛読して、印刷人のところで井上源之丞、山田三郎太、木呂子斗鬼次の名をしばしば見た。井上山田両氏は凸版印刷株式会社とあったから、その社の責任者だろう。少年の目にそれは男らしい名に見えた。昭和初年でも三郎太はもうめったにない名だったから、たぶん老人だろうと私は勝手にきめていた。

当時わが家にごろごろしていた古本に、縮刷本の漱石全集や一葉全集があった。漱石全集の著作者は夏目金之助で、発行者は和田むめである。発行所は春陽堂で、電話本局〇十〇番である。大正何年何月何日に初版を印刷発行して、版を重ねること十何回、そのつど発行年月日を書いてある。十版なら十行、十五版なら十五行、それは一行ずつ並んでいたから、子供の私は丹念に拾って読んで、そんなに売れたか、それなら名著なのだろうと感心した。

べつに著作者は夏目金之助とあるから、漱石は号で、金之助は本名だということが分る。

和田むめとあるから、これが春陽堂の女主人だろうと分る。春陽堂は今では振わないが、明治大正時代は一流の版元で、漱石の本はたいいていここから出ていたことが、奥付裏の広告で分るのである。あの木呂子斗鬼次という名は、この店の印刷人のところでおぼえた。

奥付を読むのは、私だけではないとみえ、のちに書物の奥付は、次第に意匠をこらすようになった。今でいうレイアウトを工夫するようになった。それについても話したいが今は略す。

昭和二十年まで新聞雑誌と書籍は、たとえ謄写版で印刷したもので、納本する義務があった。納本しないと罰せられた。新刊が出ると、だから二部を見本として内務省へ届けた。それを役人が検閲して、別条なければ発売することが許されたが、あれば注意され、沢山あれば発売は禁じられた。責任者は出頭を命じられ、事と次第によれば訴えられ、なかなか釈放されなかった。

明治時代の新聞は、規模も小さく、発行部数も少なかった。記者は社会の木鐸ぼくたくと称して、利によって動くことを潔いさぎよしとしなかった。義によって動いた。義によれば、自然ながく一社にとどまっていられない。意見が対立すれば争って、直ちに去ることを繰返した。それはさながら去ろうと待ちかまえているようだった。力ある大記者は、自分で新聞を創刊

したから、去っても頼る新聞社には困らなかったのである。

たとえば、斎藤緑雨は「今日新聞」に二度はいって、二度追われている。「自由の燈ともしび」というのはいって、ここは改革沙汰がおこって除名され、「朝日新聞」には行って、少しは取立てられたが退社した。(略)「国会新聞」、「改進黨新聞」はなまけ者だという理由で逐われた。「二六新報」にはいり、「時論日報」にはいったが、われを迎えるほどの社の、どうして倒れないことがあるう。もう新聞とは縁をもつまいと思ったが、またまた「万朝報」には行って、ここは自分からやめたと回顧している。それが明治三十二年、この夥しい進退は僅々十余年間の出来事だという。

今の新聞記者は朝日から毎日へ、また読売から毎日へと移ること少いが、以前はしばしば移ったのである。

緑雨の志は文章にあって、政治にはなかったのに、それでも法にふれて、「今日新聞」では七週間の発行停止を招いている。「万朝報」でも一度は官辺の忌諱にふれているから、志が政治にある記者なら、いくらふれるか分らない。

編集人と発行人の二人が、訴えられ、牢屋にいれられると、当時の新聞は出なくなる恐れがあった。だから、編集兼発行人と称して、一人で二人を兼ねたのである。兼ねれば被

害は一人にとどまる。しかも、社内で重要でない人物に兼ねてもらうと、重要な二人は共にまぬかれる。

これを名義人という。法は表にいる名義人を罰して、裏にいる執筆者を罰することができない。窮して考えだした苦肉の策である。

それが昭和になってもまだ残っていたのは、その必要があったからである。

たとえば、天皇陛下を、天皇階下と誤って印刷すると、右翼は勇んでかけつけた。右翼なら金一封を捧げて帰ってもらうことが出来たが、軍人の叱責には出頭しなければならぬ。始末書だけで済むこともあるが、訴えられることもあった。それを引受けるのがこの名義人だったのである。昭和の大新聞は名義人を飼ひ殺しにして、事故のたびに慰藉料を与えていたという。それなら前科のほうはどうなっていたのだろう。楓井金之助氏は前科何犯か、ひとごとながら私は案じたのである。

俗に眼光紙背しほはに徹すというが、私は奥付をにらんで、これだけのことを察したのではない。風のたよりで、あとでいろいろ知って、楓井氏の名を改めて見直したのである。

戦後その検閲はなくなった。したがって、納本の義務もなくなった。以前、納本された本は、一部は自動的に上野の図書館に回されたから、日本中の本は遺漏いろうなくここに集まっ

た。あれはまず完全な図書館だった。

ところが、納本の義務がなくなると、本も雑誌も集まらなくなった。国会図書館は、なるべく寄贈してくれ、くれなければ買うが、安くしてくれと頼んだ。版元の過半は応じたが、応じない版元もあった。たとえばエログロ雑誌は、国会図書館に納まりたいと思わなかったかもしれない。図書館のほうも、納本してくれと一度は言っても、二度目は熱心に言わなかったかもしれない。したがって、今の国会図書館は、以前の上野の図書館と違って遺漏だらけである。

検閲がなくなれば納本の義務もなくなる。したがって奥付もいらなくなる。すでに、戦後の新聞には奥付がない。雑誌にはまだあるが、形ばかりである。単行本には、発行所を示す場所として、いまだに巻末のページが残っている。けれども、いま奥付に出ている名は名義人ではない。責任者である。

一社で八大雑誌、十大雑誌を出している版元では、奥付に編集長の名を出すことが多い。八大雑誌があると、編集長は八人いる勘定で、奥付にその名が出ているが、よく見るとしばしば交代している。

成績によって交代すると聞いた。発行人と編集人は昔は兼ねることがあったが、今は兼

ねない。発行人は編集を一任して、手だしをしないことが多い。

昨今の編集長がその席を失うのは、もっぱら利のためである。彼が責任者になって何年もたつのに、発行部数が減るばかりなら交代しなければならない。ほかのことはいくらでも弁明できるから、このごろは数字だけをいう。数字は弁明を許さない。

一号ごとに五百万円損すると、月刊なら年に六千万の損になる。週刊なら月に二千万、日刊ならさらにふえる。一誌の損は会社全体に及ぶから、責任者にいつまで時間を与え、回復を待ってはくれない。早く食いとめなければならぬから責任者をかえる。適任者がなければ、他から迎える。

明治のむかしは、離合集散は言論によって行なわれた。今は数字によって行なわれる。利は義を蓋^{おほ}っているが、蓋いつくすことはできない。義は苦しがつて利をくつがえす。明治末年以来、ずいぶん利の全盛時代が続いたから今度は義が争われる番かもしれない。

毎号及び時々寄贈

本や雑誌は商品だから、むやみに贈呈してはいけないという意見と、贈呈したほうがいいという意見が、どこの版元にもあって、したがって同じ社内でも、上役の意見次第で贈呈したり、しなかったりすることがあるようである。どちらかというと、私は贈呈したがるほうである。

このことを私は、文藝春秋に学んだ。若年のころ私はこの雑誌に二、三度文章を載せて貰ったことがある。そしたら、いつまでも雑誌を送ってくれたのである。

毎号執筆する人に、毎号送るのは当りまえだが、二、三度書いてそれっきりのものに、ながく送り続けるのは珍しいことである。

けれども、いくら貰っても、雑誌のことだから、一々礼状は出さない。手ごたえがないのは送るほうにしてみれば張り合えないものである。そのうちカードを整理して、送るのをやめるのが一般である。なお送り続けるのは、その整理のとき継続を命じる人がいるの